

優秀賞

3人用の座席

秋谷 正夫

千葉県



午後十時過ぎ、私は電車の中にいた。三人がけ用椅子の左端に座り、右端には、四十を超えた男性が座っていた。

電車が駅に着くと、六十半ばの初老の男性が乗ってきた。私のとなりに座ろうと寄ってきたので、少しつめて座りなおした。右端の男性は眠っていたので、初老の男性は右端の男性のひざを軽くたたき、少しつめてくれるよう催促をした。男性は目を覚まし、初老の男性の顔を見るなり、いきなり大声を出した。

「おまえ、オレのこと気安く触るな」

突然の威嚇だったが、初老の男性は平静で、おびえることもなく、笑みを浮かべていた。

電車は走りだした。しばらくすると右端の男性から「おう、座れよ」と声がかかった。初老の男性はお辞儀をして、静かに座った。

彼は相変わらず穏やかな笑顔を絶やさない。二人は、しばらく黙ったままだ。やがて、右側の男性が初老の男性に話しかけた。

「悪かったな。オレは、すぐにカッとなって喧嘩になるんだ。今日は優しい方だったので、喧嘩にならず、助かりました。すいません」

「こちらこそ、ご迷惑をかけまして」

初老の男性は穏やかに答えていた。

そのあと、二人はいつのまにか世間話をするようになっていた。まるで昔からの知り合いのように、仲よくしゃべっていた。

右端の男性の降りる駅に着いた。

「お父さん、今日はありがとうございました。また、よろしくお願いします」丁寧に挨拶をして、駅に降りた。男性の最後の言葉も「すいませんでした」から「ありがとうございました」に変わっていた。「あなたのおかげで、喧嘩にならなくてよかった」という思いが伝わってきた。

彼のように、いつも優しい気持ちを持った懐の大きな人間がもっと増えたなら、世の中のつまらぬ争い事はずっと少なくなるだろう。一部始終を黙ったまま見ていた私は、彼から多くのことを学ばせていただいた。